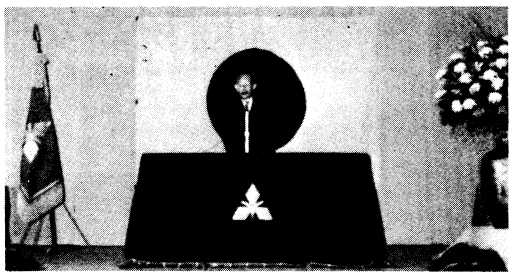
秋高同窓会だより

発行者
秋田県立
秋田高等学校同窓会
印刷所
秋田マイクロ写真
印刷株式会社

卒業おめでとう！
新入会員は462名

校歌の精神に帰って創造的に生きよ


内藤庸男新会長挨拶

秋田高校第三十六回の卒業式は例年どおり三月七日、午前十時から講堂（小体育館）で挙行され、普通科四二一名、理数科四一名、計四六二名が秋山校長から卒業証書を授与された。

卒業式の後、同窓会入会式が行われ、佐藤照氏（昭31卒）の司会のもと、昨年の役員改選で小玉孝次郎氏（大7卒）からバトン・タッチした内藤庸男新会長（大13卒）があいさつを述べた。「人間にはそれぞれ個性がある。勉学にすぐれた者もいれば、スポーツにすぐれた者もいる。そのすぐれた個性に応じて生きていくべきである。」として著名な登山家植村直己氏の話におよび、更に同級の、第三十六代校長の鈴木健次郎先生の有名な言葉、「汝なんの為にそこにありや」に触れ、「校歌の一節『わが生、わが世の天職いかに』は同じ問いかけ故、歌い続けられてきた校歌の精神に帰って、常に自己を厳しく凝視し、自己の内外のマンネリ化を打破して、創造的に生きよ。」と結んだ。

また恒例の歓迎のあいさつは秋田市教育委員会副委員長をしておられる浄円寺（土崎）住職菊地茂氏（昭16卒）が述べた。氏は哲学専攻らしく、西洋の哲学者・文学者の言葉を挙げながら、やはり「人生いかに生くべきか」――「現実を一歩一歩踏みしめて歩め。希望にだまされて現実を忘れるな。」――英語をまじえて説明され、次のように結んだ。「皆さんはやがて大学を卒業して社会人になる。これまでの学校という場は皆さんを肯定してきた。しかし社会は自己を否定する場である。その否定に負けずに生きて欲しい。」――若者の生き方を力説された。

引き続いて内藤会長から記念品―校章入りのループ・タイと紅白の饅頭が贈られ、次に新入会員を代表して田口大志君が謝辞を述べ、最後に京野大三新副会長（昭12卒）の力強い音頭で万歳三唱。同窓会もこうして百十一年のスタートを切った。

母校だより

百十年の歴史を重ねた先輩の意志と光輝ある伝統を引き継ぎ、文武両道にわたる一層の研讃を期して、職員・生徒一同、秋田高校第二世紀十一年の年を迎えることとなった。秋田高校第二世紀の歴史も、質実剛健の歩みを地道に進めつつあるものと確信する。

本年度教職員人事異動では、十二名の転退職教職員を送り、新たに十五名の教職員を迎えた。三月七日卒業証書授与式では四六二名の卒業生を送り出し、四月六日四七四名の新入生を迎えた。

今春の進学状況は、現役の合格者は、国公立大学一六七名、私立大学六七名（延べ人数、ほか短大六名）であり、主都圏私立大学の上位校での衰退が目立っている。浪人の合格者が、国公立・私立ともその減少分を数では埋めてはいるが、本年度はインターハイの秋田県開催ということもあり、現役の一大奮起を期待している。

五月二日恒例の大運動会を開催、あいにく天候には恵まれなかったが、意気天を突くものがあった。

続いて五月十五日PTA総会を開催し、会長に三宅一郎氏、副会長には竹谷徹三郎氏（再任）小玉康延氏、秋山光雄氏（校長）が選出された。

五月十二～十四日の中央地区総体では、柔道・卓球・バドミントンが団体優勝、水泳を中心に各競技個人でも多数の入賞者を出した。六月八～十一日の全県総体では、59インターハイにむけ大いに意気があがった。インターハイ出場は次の通りである。

ボート、弓道団体男子、柔道団体及び個人重量級（土佐）、剣道団体男子及び個人女子（岩船）、卓球団体男子及び個人単（織田、佐藤、猿田）・個人複（佐藤・猿田）、バドミントン団体男子及び個人男子単（魚谷）・個人複（魚谷・本間）、レスリング個人（渡辺拓哉）で、水泳は七月末の東北大会で出場者が決定するが、個人数名が有望である。

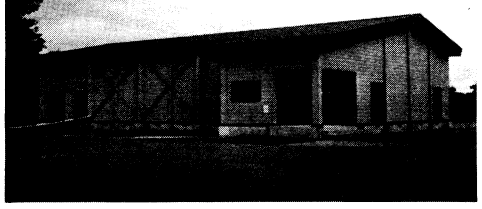
また将棋・囲碁が全県高校選手権大会に優勝、放送部も県放送コンテストで、研究発表部門及びラジオ番組制作部門で最優秀賞を獲得し、それぞれ七月、八月に開催される全国大会に出場する。

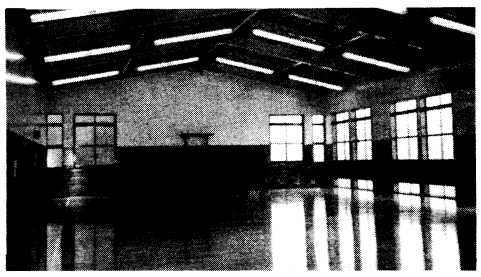
硬式野球は、対秋商定期戦で3対2で敗れ、春季中央地区大会では初戦で経法大附高に2対○で惜敗した。七月十三日からの甲子園大会県予選では、一、二回戦はコールドゲームで勝利をおさめたが、三回戦の対秋田中央高戦で4―4でむかえた九回裏、スクイズを決められ惜敗した。

軟式野球は県大会を終え、七月末能代市で行われる奥羽大会の出場権を得、優勝目指して猛練習に励んでいる。

昨年十二月一部を焼失した格技場が、本年六月末に改築落成した。昨年、一・二年生として創立百十周年を感激のうちに迎えた生徒も、二・三年生として長い歴史と伝統を受け継ぎ、新しき時代の秋高生として、有意義な高校三年間を目指し営々と努力している。教育環境も次第に整備されつつあり、そのもとで、自主自律の精神を胸に、学業と部活動の両立をめざしたくましく成長をつづけている若き後輩生徒に対して、先輩諸賢の尽きることのない暖いご鞭撻とご声援を切にお願い申しあげる次第である。（杉田　記　S21）

新格技場竣工なる


新格技場の外観


新格技場の床面

昨年の暮れ、原因不明の出火により焼失して、学校ならびに剣道同窓、特に59インターハイ出場に意気込む剣道部を悲しませた剣道場は、この程「格技場」として蘇った。

総工費（含電気工事）四千二百八十六万円。規模は県の基準に従い、鉄骨平家建て、面積三百五十平方メートル。焼失前の剣道場が、県基準にPTAおよび同窓会の地元寄付の加わった五百二十七平方メートルの広さであったが、新格技場はひと回り小さく、更衣室・師範室など一切ない、全くフロアだけの実利的で瀟洒なもの。特徴を言うと、採光のとり方がよくて、非常に明るいことや床に神経を使って、弾力を持たせたこと。更に将来増築可能の設計をしていることが挙げられる。

着工五月十八日、完工六月二十五日という猛スピードで、剣道場跡に建立された。これまで重い防具を持って、スポーツ会館や秋大を駆けずり回っていた部員たちも、借家住いの悲哀と労苦から解放され、59インターハイ出場とあいまって、光の流れる新道場の床面を力強く蹴っていた。

秋高同窓会総会ご案内

日時　八月二十六日(日)　午後三時半　理事会
　　午後四時　総会
　　午後四時半　懇親会
会場　秋田市・あきたくらぶ
案件　(1)会務報告　(2)決算・予算の承認
申込費　五千円（学生二千円）
　　秋田市手形中台一番地
　　母校同窓会事務局　☎32―7200

先輩訪問（その九）

大沼　滉氏（大5卒）

東京支部総会が開かれたついでに、大沼滉（ひろし）大先輩（T5卒）に「先輩訪問」のインタビューをお願いした。今年米寿をむかえた大沼先輩は多少耳が遠い気がしたが、色つやもよく矍鑠として応じてくれた。

現住所、東京都新宿区西新宿八―九―八。明治二十九年生まれの八十八歳。卒業後のお勤めは東京国立博物館が中心。現在は五歳の時からやられて来た書道を教えることが何よりも楽しみとか。号を大沼十洲。「十洲書塾」を開いて二十年近くなる。

いつもお弟子さんが七、八人はいるそう。

秋中時代の思い出に話をむけたら、「身体が丈夫でなかったため―運動部はやらない。」と断りながらも、大正四年の第一回全国中等学校野球大会決勝戦で延長十三回の末、京都二中に2対1で惜敗した話を頬を紅潮させて語ってくれた。当時の名捕手渡部純司先輩や亡くなられた長崎広投手と級友らしく野球談義がしばらく続いた。

また当時の校舎（東根小屋町校舎）の思い出を語り、玄関の円柱がコリント様式で、白ペンキ塗りであったこと、講堂は二階にあって「忠孝」の額があったこと、更に当時は授業時間の終始を小使さん（現技師さん）の吹くラッパによったこと、三雲隊（朱・黄・青）に分けて行われた秋の運動会の模様など、鮮明にはなしてくれた。

最後に現在の秋高に望むことをお願いしたら、一寸なさけないような顔をして、「いい意味で、新聞に載って欲しい。硬式野球はやはりいつも甲子園出場を果たすように。（今年の春の選抜）金足農が出たのにびっくりした。当時はそういう学校もなかったし、とても驚いた。世の中変ったなあ。今日も来ると思うが、渡部純司君（結局不参加）といつもはなしているよ。秋高は常勝でなくっちゃ。ラグビー、剣道もあるが、わしらからすれば、第一回大会の印象があまり鮮烈なせいか、（硬式）野球だね。伝統なんかなくなったと違うか……。」―古き良き時代の先輩からすれば、最近の秋高の部活動がまことに「歯がゆい」のだろう。語気強く詠嘆していた。

米寿の大先輩―大沼さんよ。今年だって甲子園行きの切付を手にしますよ。59インターハイ秋田大会にも六チームも出ていますよ。いつまでもご壮健で、秋高を温かく見守っていて下さい。（大久保・田口能）

天上天下

今年は秋高創立百十一年―いかにも新たなものに出立するにふさわしい縁起のいい数字である。折しも59インターハイ秋田大会と重なった。本校で出場権を得た団体は六チーム。まさに爆発的な成果である。▽優勝旗こそ、七年ぶりのボートと九年ぶりの弓道と二本しかないが、伝統ある剣道・柔道・卓球とバドミントンが準優勝だった。それに、インターハイと直接関係ないが、水泳部が一点差で全県総合優勝を逸したのは惜まれた。いずれにしても、去年は創立百十周年で燃えに燃えた秋高が、今年は59で燃えている。▽職員室の中央、教頭の机の前に、優勝旗が林立する―そういう光景は百十一年の歴史の間で何度となくあった。大正十一年には全県と東北を合わせて、八本の優勝旗を手にし、卒業式にそれでアーチを作ってくぐった話が伝わっている。▽今回はその後ボートが東北優勝を果たしたので、計三本。見事である。当時からすれば高校が五倍以上も増えた。しかも各校とも運動部に力を入れ、それぞれ全県優勝できる程の特技を持っている。その中で三本とは立派。ましてインターハイ出場六チームとなれば圧巻と言えるだろう。心から健闘を祈るものである。▽秋高と言えば全県で筆頭の進学校。こちらも県民・千五百名父兄の期待がかかっている。進学と部活動の両立―文武両道。と言っても次元の低い両立であってはならない。両道とも「東北の雄」でなければならない。▽その為には、周囲や自己自身に甘えることなく不断に玉を磨くべきである。折角の玉も磨かざれば、鈍物になる。伝統の校風を誇る学校も清新な活力がなければ、老大国になってしまう。▽創立百十一年新たな出立の年―幸先よい59インターハイ秋田大会、六チーム出場を機に、オワシスの新たな水を新たな革袋に入れて、遙けき理想の国目指して出立しよう。（田口能　記　22卒）

秋中イーグル会

（同窓生ゴルフコンペ）

この度、秋中卒同窓の五十歳以上の方でゴルフに興味のある方を対象として「秋中イーグル会」を結成。この六月より発足することとなりました。

多少なりとゴルフに興味のある方、腕に覚えのある方、ない方も皆様振って参加下さるようお知らせします。

◇参加要領

一、参加希望者は秋田カントリークラブ・フロントへ開催日前日まで、電話で申し込み下さい。

一、参加料は一人三千円とし、家族のゲスト参加も出来ます。

一、小雨は決行とし、中降以上は中止とします。

一、ビジターの方は割引きします。

つどい

一、当会への照会は幹事・東海林広司（S17卒）まで連絡下さい。

◇59年度ゴルフコンペ開催日程

6月17日　第3日曜　9時36分
7月15日　〃　10時6分
8月19日　〃　9時36分
9月16日　〃　9時48分
10月21日　〃　9時54分
11月18日　〃　9時42分

◇第一回目ゴルフコンペ

去る6月17日に行われ、19名が参加、好天に恵まれ同窓生交歓の中、存分に野趣を満喫、左記入賞結果となりました。

優勝　辻　悌五郎（S27卒）
準優勝　根岸　秀治（S17卒）
三位　加納（健）（S23卒）
四位　高橋（和）（S25卒）
五位　佐々木（己）（S21卒）

（東海林　記）

第八回秋高女子卒業生の集い（若菜会）

○日時　昭和58年7月16日　午後5時30分
○会場　アキタパークホテル「新館」
（ご出席下さった先生6名、会員25名）

この度は、第四期（S32年卒）の私どもの当番となりましたが、秋田在住の人が少ない上に丁度年齢的に一家の中核である忙の時間をなかなか作ることができず、42年卒の五十嵐和子さんのお力もお借りしてなんとか会を開催することが出来ました。

年々、会員の出席数が少なくなってきているのが淋しいかぎりですが、それでも各年次毎のテーブルにお教えいただいた先生方に座っていただき、それぞれにお話もはずんで、かくれていた話題が日の目をみたのもあったようです。

秋田高校創立百十周年記念式典を二カ月後に控えて、その為の話もはずみ、二カ月後の再会を約して散会致しました。

（S32卒　中川鞆絵　記）

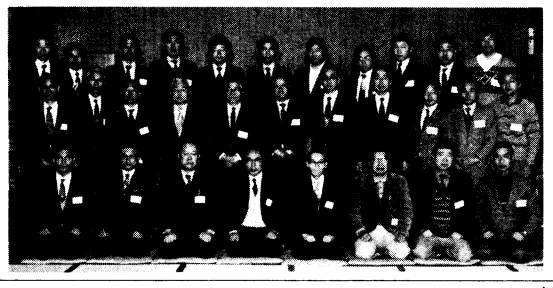
大館支部総会

○日時　2月23日午後6時
○場所　幸町「北秋クラブ」（S25卒　石川寛司経営）
○参加会員　31名

寺沢洋一君（S43卒）歯科医の司会にてスタートし、奥山宏会長（S15卒）の挨拶があり、加藤氏（S40卒）より会計報告がなされました。

かねてより申し入れがありました奥山会長の辞意について審議の結果、新会長として布袋屋伊作（S20卒）君が満場一致にて決定しました。ついで長い間会長の重責を果たされた奥山氏に記念品の贈呈がなされました。

布袋屋新会長より挨拶があり成田朝春（S18）氏の音頭にて乾杯し懇親会に入る。小人数ながら非常になごやかな雰囲気にて9時30分再会を約して散会した。



昭和58年男鹿支部総会

講演会＝小野清子氏を迎え

○とき　58年8月20日
○ところ　総会　男鹿駅前ホテル「諸井」
講演会　船川港公民館

男鹿支部は例年の通り総会に先立って、講演会（連続四回目）の開催で始った。

講演会は午後三時、秋山秀麿幹事長（S27卒）の挨拶と講師紹介で開催された。

講師・小野清子氏（秋田の生れ、ローマ・東京オリンピック体操代表選手、現在JOC委員等）は、「燃えるオリンピックと私の青春」と題し、一時間三十分にわたって流暢かつ格調の高い講演をされ、立錐の余地のない程の約四百名の聴衆に深い感銘を与えられ近時稀な講演会であった。

その後、五時三十分から総会を開催した。

吉田仁誠副支部長（S16卒）の挨拶のあと同窓会本部の大嶋副会長の挨拶、校長代理の杉田宏先生の進学・スポーツ活動等についての説明報告があった。

引き続き男鹿支部顧問、目黒邦之助氏（S2卒）、今村久悦氏（S9卒）の力強い挨拶と乾杯によって小野清子氏を交えての懇親会に移った。

宴が和やかに進むうちに母校愛が深まるとともに親睦感が自然と涌きあがり校歌・校友会歌を高らかに熱唱し、母校の限りない躍進と同窓生の益々の健闘を祈って盛会裡に散会した。

（秋山　記）

第12回26年卒関東地区同期会

二月十八日(土)、銀座武寿司ふく武に於て、会員四十名出席して盛大に開催された。当日は幹事長東海林峯雄君の司会のもとに七年ぶりの池内広重君の乾杯の音頭のあと、卒業以来三十三年ぶりに出席の佐々木信君、鈴木琢也君、寺田実君、本間和雄君、加賀谷強君、山下直樹君の懐しい挨拶があり、懇親会は談笑裡に進んだ。

最後に、元コーラス部三国屋環君の音頭で校歌、応援歌、校友会歌の大合唱のうちに、お互いの健康を祝し、又来年の再会を約して拍手のうちに散会した。

昭六会

○日時　昭和59年6月2日(土)　午後4昭
○場所　秋田ニューグランドホテル
出席者　遠藤三郎、鎌田民治郎、菊地杜夫、根田正吉、進藤末治、橋本長康、平沢尚忠、武藤理市郎、阿部武次、島田洋治、近藤英夫、森　一（以上12名）

出席者数は少なかったが、東京から進藤君が出席されたことは大きな収穫だった。したがって、柔道の全国優勝当時の話を皮切りに、恩師のこと、欠席者の近況、特に病気、入院などのことが話題にのぼり、最後には近藤君を中心に成人病の話に花が咲き、島田君（医師）の適切なアドバイスに耳を傾けた。みな70歳を越えているので、これからも心身の健康に気をつけ、来年又、元気で会いましょうと進藤君を見送りながら開散した。心の若返りを覚えた楽しいひとときだった。

（森　記）

在京80期会

（59・5・23）

昭和51年、そして昭和55年と在京会を開いていたが、有志発起人の活躍により久々に開かれることとなり、秋田から恩師を連れて来て欲しいとの事で菅原繁雄先生を飛行機でお連れした。

会場は発起人の高堂君の顔のきく所とて新宿歌舞伎町、中国割烹「桃里」で旧友34名（秋田からも3名参加）が集り、何と30年振りの田村鉄男先生も出席されていた。タム鉄先生は原子力事業団を退かれてから三社の顧問をやっておいでとの事で、腹はかなりの太目にはなっておいでだが、風望や話し方は以前と変わりなくタム鉄健在を見せてくれた。

女性も豊田武子（兵庫西宮）後藤早苗（浦和）、斎藤峯子（保谷）の三人が出席し三十年振りの話に花を咲かせた。二次会は同ビルの「すたんど割烹」で飲み直し、十一時に土曜日の夜の歌舞伎町で再会を約し散会した。

何よりも驚きは、会費の割に料理が豊富で腹一杯食べさせてもらったこと。幹事の三氏には深く感謝。次回の幹事役も頑張って欲しい。

（長野　記）

卒業三十周年記念会

八十期会

○日時　六月二十三日(土)
○会場　杉のや

会に先だって、卒業後初めて母校を訪れるという東京から駆けつけた山田宣義君を先頭に十数名の有志が母校を訪問。

「在学中、サボッタ連中が集まったナ」とだじゃれを飛ばしながら、同期の近藤繁教諭の案内で校舎を一巡。

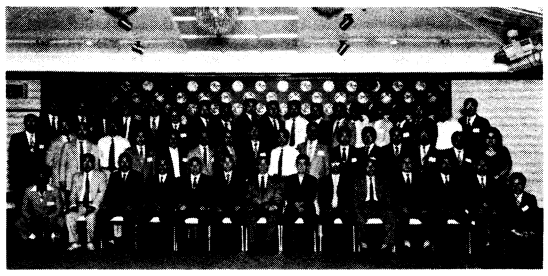
三十年記念会は、なるべく旧校舎に近くというので杉のやに席を作り、出来る限りの在秋恩師をご招待したいとの願いから秋山現校長を初め、鈴木（勝）、深井、菅原（繁）、畑沢、渡部（修）、山下、今江、加藤（仁）、最上、山谷、館岡各先生を迎えることが出来た。

幹事を代表して大里君が挨拶。秋山校長より、「今、隣の深井先生と話していたが、三十年経つとふけ方もあまり我々と違いがないので心強い。」とジョークを交えながらの母校の近況をご報告があり、鈴木勝三郎先生の乾杯の音頭で開宴。恩師各位から昔話を含めたスピーチを笑いの中で伺い感慨無量。卒業三十周年記念として代表大里君から、「学校の為に……」と記念品の目録を秋山校長に受取って戴いた。

往年の紅顔の美少年（？）もかくも変貌するものかと薄頭、白髪まじりの姿に、風雪三十年の長さがしみじみと感じられる。思い出話に花が咲き時の経つのも忘れる。

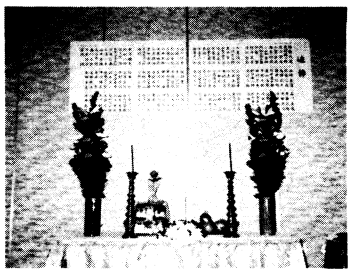
「ナンボでも金を出すから会を閉じないでクレ」とごねる湊君を説得し、彼の音頭で校歌を歌い、畑沢先生の乾杯で互いの健康と再会を祈願しつつ閉会し、三々五々街に散る。旧友参加者数四十五名。

（高橋郁　記）



昭和59年度 矢留クラブ定例総会

春はいまだ寒き、桜も五分の四月末、矢留クラブ昭和59年度定例総会は秋田市彌高会館において開催。総会に先立ち、秋高野球部創草以来の物故者百十二名の慰霊法要を、土崎港中央三丁目休宝寺住職清沢会員の読経により厳粛に取り行いました。



はるばる埼玉より御来駕の渡部純司長老をはじめ、佐々木義武名誉会長、佐藤幸助、西野忠男、三浦次郎、小味渕金也の諸先達及び中老のOB諸氏は、貼り出された物故者名に、はるかなる若き日を想起して感慨深くその在りし日を語り、若い会員諸君も又それぞれに同時代の球友のおもかげを語ってうなづき合う情景は、「秋高野球」というアイデンティテーがまさに80余年の歳月を貫いて実存する姿というべきでありましょう。

出席者一同、あらためて感銘を深くした次第です。

引き続いての総会は、審議万端滞りなく終り、更に新旧膝を交えての懇親会も和気あいあいの中、矢留クラブの団結隆盛活動と現役選手諸君の秋高野球精神、実践心技の向上に尽すべきを誓いつつ歓談、高唱、時の移るのを忘れる。

こうした雰囲気、気風にはぐくまれる秋高野球は、その成果正に期して待つべきを胸に、名残りを惜しみつつ終幕という次第でした。

（中野　記）

昭和五十九年度 東京支部総会

○とき　六月二十二日　午後六時
○ところ　池袋東武百貨店　バンケットホール

今年度の東京支部総会は、来賓に学校側から秋山光雄校長、大久保正樹（S42卒）事務局、同窓会から京野大三副会長（S12卒）、また参議院議員出口広光氏（S18卒）をお迎えして行われた。

金谷勇支部長からは、①十二回目の支部の会員名簿を調整して喜ばれていること、②昨年硬式野球部の甲子園出場に際して在京OBの協力で盛大な選手歓迎会を行ったこと、③東京地区に「秋田県高校同窓会支部（四十校程）の連絡会」が生まれたことなどが述べられ、秋山校長先生からは、①おかげ様で百十周年事業ならびに式典が盛大裡に終了し得たこと、②硬式野球は今年も甲子園出場を果たすこと、③59インターハイ秋田大会には本校から、ボート・剣道・柔道・弓道・卓球・バドミントンの六チームが出場すること、また本校生徒が中心になって、「推進委員会」を設置して「まごころ秋田」のスローガンで全県高校生一人一役運動を展開していることなどの近況報告が力強くなされた。

また京野副会長からは、①百十周年記念行事もおかげ様で滞りなく終了したこと、②東京支部の活動に敬意を表することが述べられ、続いて大久保同窓会事務局から、「今年も一回りたくましくなった太田投手を擁して甲子園を目指す」旨の決意表明がなされた。

懇親会は、出口参議院議員の乾杯の音頭ではじまり、八幡平出身の酡島とし子一行のおなじみの秋田民謡などのなかで、二時間近く賑やかな楽しい雰囲気で終始した。

◎出席者（来賓をのぞく）
大沼滉（T5）、土井栄治（T9）、富永五郎、田村忠（T11）、佐宗金太郎、佐藤文雄（T12）、笠井重光、水沢久三郎、吉成一郎（T13）、加賀谷篤一郎、宇佐見盛志、金谷勇（T15）、木村元治（S2）、桜田亮直（5）、浦川康男直樹、戸田百年（7）、浦川（9）、橋本幸二郎（18）、真崎隆三郎（25）、狩野良徳、三田茂、朝倉俊夫、辻原謙三郎（26）、高橋恒雄（27）、佐々木康雄（28）、加賀谷凞彦（29）、土屋博（30）、熊谷光太郎（33）、岩川作丞図（39）、松尾正（43）。

慶祝

西仙北町功労者表彰
工藤太刀朗（S7　医博）

※伊藤恭五郎（S7）元秋田清酒会長遺族、本人の意志により奨学基金として南外村に壱阡万円寄付。

哀悼

池田　重健（T13）於仙北59・6
伊藤恭五郎（S7）於仙北59・3
古井　正二（S7）於秋田59・4
川井　忠明（S20）於秋田59・6
佐々木　英（S27）於東京59・4
奈良利喜三（S27）於鹿角58・
早川　宏道（S28）於秋田59・6
小笠原英和（S53）於山梨59・6
石川　貢（S57）於東京59・5
山田　博（旧職）於秋田59・6

伝統の底力を発揮 六種目インターハイへ

五月中旬行われた中央総体で柔道・卓球・バドミントンの三種目団体優勝、陸上・水泳総合優勝で、意気あがる運動部は、六月の全県総体では59インターハイ秋田大会に照準を合わせ、爆発的な力を発揮。ボートの七年ぶり、弓道の九年ぶりの優勝をはじめ、準優勝ながら、剣道・柔道・卓球・バドミントンの六種目に出場権を獲得。またわずか一点差で全県総合優勝を逸した水泳や個人戦も大いに頑張り県民に伝統の底力をマザマザと見せつけ、「サスガ秋高、オトロエズ伝統」の印象を強く与えた。出場者は、一層精進し、秋田県選手団の先頭に立って、県民の期待に添うよう、活躍することを念じたい。

優勝
ボート、東北大会も制す
弓道、県体

▽**ボート**（中央地区　二位）
全県総体（七年ぶり）
一位　秋田　四分〇秒七四
二位　本荘　四分二秒一五
三位　由利工四分二秒八九
東北大会（七年ぶり）
一位　秋田　三分四四秒
二位　福島商三分四六秒六
三位　本荘　三分四七秒二

▽**弓道**（中央地区　三位）
全県総体（男子九年ぶり）
準決勝　秋田9－5湯沢
決勝　秋田10－7中央県体（八年ぶり）
決勝リーグ秋田6－4男鹿
秋田7－4湯沢
この結果、東北ミニ国体の出地権を獲得。奈良国体が目標。

準優勝（インターハイ出場）

▽**剣道**
決勝リーグ秋田4－1中央
秋田3－2秋田商
秋田1－4秋田南
個人（インターハイ出場）
女子　岩船　四位

▽**柔道**（中央地区　優勝）
全県総体
団体　準優勝
個人重量級　土佐　優勝
県体　**（国体出場）**
無差別級　土佐　優勝

▽**卓球**（中央地区　優勝）
全県総体
決勝リーグ秋田3－0大曲工
秋田3－0大館商
秋田0－3秋田商
個人（インターハイ出場）
シングルス　猿田準優勝
織田三位、佐藤五位
ダブルス　織田・佐藤三位

▽**バドミントン**（中央地区優勝）
団体　準優勝
個人（インターハイ出場）
シングルス　魚谷　優勝
ダブルス　魚谷・本間優勝

▽**レスリング**
個人（インターハイ出場）
75K級　渡辺　準優勝

伝統のラグビー・サッカー
いま一歩で、敗退す

▽**ラグビー**（中央地区準優勝）
全県総体
二回戦　秋田0－43秋田工

▽**サッカー**
全県総体　三位
準決勝　秋田0－3西目

▽**バスケット**（中央地区準優勝）
全県総体
準々決勝秋田45－123能代工

▽**バレー**（中央地区　四位）
全県総体
一回戦秋田0－2大館鳳鳴

▽**陸上**（中央地区　総合優勝）
全県総体
男子一〇〇M　大野　三位
二〇〇M　大野　優勝
男子四〇〇Mリレー　三位

▽**水泳**（中央地区　総合優勝）
全県総体（大会新のみ）
男子二〇〇メドレー青木優勝
四〇〇メドレー青木優勝
四〇〇フリーリレー優勝
四〇〇メド・リレー優勝
八〇〇フリーリレー二位
女子四〇〇フリー　栖岡優勝
八〇〇フリー　栖岡優勝

硬野三回戦で涙をのむ 軟野は東北大会出場

昨年十年ぶり十四回目の甲子園出場の栄に輝いた硬式野球は二年連続出場を目指して、七月十四日から全県大会に望んだが三回戦で惜しくも敗れ、宿願を果たせなかった。また東北大会連続出場を狙う軟式野球は見事出場権を獲得。全国大会出場が期待される。

硬式野球
一回戦　秋田10－0能代農
二回戦　秋田7－0西仙北
三回戦　秋田4－5秋田中央
軟式野球
一回戦　秋田2－1秋田商
準決勝　秋田1－3秋田工

昭和二十七年卒同期会

○日時　六月十六日(土)
○場所　秋田市・平安閣
▽参加者　鈴木(勝)、深井、中山、吉井、桜谷、加藤(仁)、成田、山谷の八名の恩師。
同期生六十名。

卒業以来三十二年目、同期生一同五十路に至っての第一回目の同期会である。

さすがに、恩師に負けず劣らず白毛、薄頭の相貌とは成ってはいるものの、飲む程に意気軒昂たる威勢、いまだ衰えずといったところ甚だ意を強くした次第である。

鈴木(勝)先生のご講義に依れば、「人生五十」とは、人生は五十にして新たに始まるとの意であるとのこと、この心を以って後半の人生に臨みたいものと思う。

今回の幹事役は市内在住の教職グループが担当した。もっとも、この幹事、市内の有志を集めて三百六十通に及ぶ案内状の発送を割当て強制する「ダジャク」さを示したが、多くの同期の誼、協力を得たこと感謝に耐えない。

来年度の幹事には、報道関係者(魁新報・ABS)に委託することとした。多くの参加を期待したい。

（石塚功　記）

若菜会の皆さまへ

女子卒業生親睦の集い（若菜会）を左記により開催します。共学30年目になります。どうぞお誘合せの上お集り下さい。

▽日時　9月22(土)　17時
▽場所　秋田ニューグランドホテル
▽会費　五千円
当番幹事　井上　房子（29）
秋山まり子（29）
（☎28－2211）

佐藤画伯十回目の個展開く

作品「白い丘」で文部大臣賞に輝き、秋高百周年記念に因んで、青を色調にした作品数点を恵贈し、母校の会議室や研修会館を彩った画家佐藤文雄氏（T12卒・東京美術学校―現東京芸大出身）は、この程第十回目の個展を開くことになった。

タイトル　「旅・壁・私」
期日　約三十点出品の予定
「12月10日～16日」
会場　銀座資生堂

東京支部を中心とする同窓会員諸氏のご高覧をお願いいたしたい。遠く秋田から熱い眼差しで、個展のご成功と大先輩画伯のご健康をお祈りするものである。

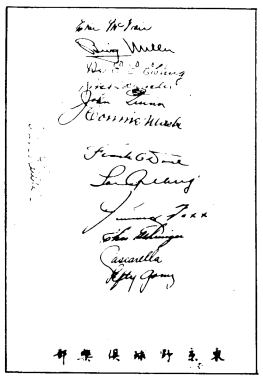
なお氏のご住所は
杉並区久我山5－24－31
☎03－334－6405
（田口　記）

一二九会 五万円を寄贈

昭和二十九年卒業組（略称一二九会、代表者長野佳司氏・秋山まり子氏）は、この程卒業三十周年を迎えて、六月二十三日(土)「杉のや」で、記念祝賀同級会を開催。卒業三十周年を記念して、お世話になった母校に役立ててくれれば幸甚とかねて別途徴収していた五万円也を寄贈した。思いがけないご芳志に学校では何か残るものをと思案中。二九会の皆さまにはこの欄を借りて深く感謝する次第。

（田口　記）

故伊藤勝三氏（T14卒） ベーブ・ルースらのサインを恵贈



日本プロ野球界の草分けの一人伊藤勝三氏（S57逝去・夫人静江氏）はこの程本校硬式野球部後援会長の和賀政男氏を通して、ベーブ・ルース、ルー・ゲーリック、ジミー・フォックスら十三名のサインを集めた色紙を硬式野球部に寄贈された。

和賀会長に由来を尋ねると、伊藤氏は甲子園にも出場し、秋中野球部の黄金時代をつくった選手で、後名門慶大の野球部に属し、米国初遠征の一員となった人。大学卒業後、氏が中心となって六大学の選手たちを集めて「東京野球倶楽部」を結成。この倶楽部は都市対抗に出たりした。

昭和九年秋、先のベーブ・ルースら米国プロ野球、野球の指導普及のため、来日。当時まだ日本にプロ野球団はなく、「東京野球倶楽部」や六大学野球部がその相手をした。色紙のサインはその時のメンバーのもの。伊藤氏は特に米遠征を通じて、彼らとは知己の間柄だったとか。

氏らはこれをきっかけに、日本にプロ野球を結成することになる。巨人軍などぞくぞく出来るのであるが、氏は戦前のプロ野球「大東京」球団の初代監督さんだった。戦中、氏は郷里秋田に疎開。野球への情熱を捨て切れず、戦後秋田に「社会人野球協会」をつくり、その初代支部長をつとめたりした。

こうした野球一筋の虫も日本プロ野球（巨人軍）結成五十周年記念を見ないまま逝去されたが、夫人の静江氏が、三回忌の法要の席上、「夫も喜ぶ筈、野球部の励みになれば幸い。」と和賀会長に手渡されたという。

米国は野球の発祥の地、その発祥の地の大リーガーの名選手たちのサイン。天才と言えども努力が九割をしめる。栄光を求めて頑張ろう、秋高ナインならびに秋高生よ。

伊藤勝三氏ご夫妻にはこの欄を借りて厚く御礼申し上げるとともに、遅ればせながら勝三先輩のご冥福と静江氏のご健康をお祈りする次第です。

（田口　記）

囲碁・将棋もインターハイ出場！

文化部では、囲碁および将棋同好会が、ともに県大会で優勝し、八月東京で行われる全国高校選手権大会にコマを進めることになった。また放送部も第31回NHK杯全国高校放送コンテストで県予選を通過している。

▽**囲碁**　個人予選敗退
団体戦　決勝秋田3－0横手

▽**将棋**
団体戦
準決勝秋田A3－0秋高専
秋田B1－2横手A
決勝　秋田A3－0横手A

▽**放送**
(1)　県放送コンテストにて研究発表部門
(2)　ラジオ番組制作部門
ともに最優秀賞に輝く。

特集 ＝後輩只今活躍中＝

秋田インターハイ出場チーム紹介

ボート部

デッド・ヒートを制した。強風と激しい雨。ボート競技にとって最悪の条件のもとでスタートしたナックルフォアの決勝は、ゴールまでの千米を、三艇ともに水の開かない（一艇身以内の差）状態のままでしのぎを削った。最終的には、二位本荘高校との差が一・五秒、三位由利工高とは二・二秒という僅差であった。顧問としての十年間、今回ほどの好レース、しかもレベルの高い競漕はかつてない。

その後開催された東北大会でも、各県の有力校二十クルーの決勝レースで、五艇の中をこの県内の三校が占め、本校が優勝、本荘三位、由利工五位と、今年の秋田県のレベルの高さが実証された。

ボート競技は一般の人には馴染みの薄いスポーツであり、特に最近の高校生にはその活動の実態は殆ど知られていない。とかく、楽をして格好のよさを求めようとする現代の風潮とは相容れない厳しさと、的確な判断力が要求される競技である。

漕手四人の基礎体力の養成は、冬季のトレーニングにかかっている。この間いかに地道な訓練に耐えたかで、翌シーズンの成績が決定するといっても過言ではあるまい。乗艇練習では、コックスの号令下、一人ひとりが四肢の如く心を一に出来るチームワークと技術。レースにあっては、たった四分間に日頃の練習成果を瞬発的に発揮できる精神力。そして他クルーに先行するためのレースの組み立てと場面に応じた冷静な判断力――。各自のあらゆる能力が総合され、止揚されて、クルーとしてのレベルが確立されていく。

今回の勝利は、選手の平常の精進と、それを支えた部員全員の力に負うものであるが、それを導き出したOB会「秋艇会」各位の御尽力に深く感謝したい。その厚意の一端に報いるためにも、インターハイでは勿論、後に続く一、二年生もこの成果を受け継ぐよう、今、覚悟を新たにして日々の練習に励んでいる。

（顧問　高田屋敏夫　記）

弓道部

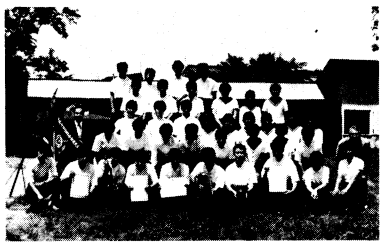
わが秋高弓道部は「勝つための集団」として練習を強化して来た。「勝つ」ことを目標におくことで、常に現状の自己を超えて行かねばならないし、苛酷なまでに厳しい練習を通して自己を鍛練し、人格を磨くのである。その際相手に「勝つ」ということは己に「克つ」ことに相通じる。射手はいろんな意味で頼るべき何者もいない孤独の極限状態に置かれる。一切の「とらわれ」の気持ちを制御できる沈着さ、不動心を支える呼吸の平常化が必要になる。これが己に「克つ」要因である。それは日常の生活態度の中に養われねばならぬ。日常生活の一節一節をきちんきちんとし終える習慣を身につけることである―こういう内容を努力目標に練習に励んで来たが、成果が実って来たのは、56年度頃からで、個人戦ながら、青木茂充、清水真木雄、木村宏二（当時二年）と三年連続インターハイに出場し、今年の男子団体優勝を導くのである。

この間の先輩後輩の結びつきもまことに強固になった。

過去に団体優勝がなかったわけでない。35年、45年、50年と三回あったし、個人優勝も51年（男女とも）、52年（51年男子優勝者）と続いている。しかし最近のように四年連続インターハイ出場の記録はない。おそらくいまの二年生は更に強いから来年もこの記録が更新される筈。

かつてシーズン・オフということで重要視していなかった冬期練習もいまではかじかんだ手で的前練習を十分するし、朝練習もすっかり定着した。勿論ランニングもかかさない。筋肉強化トレーニング体操も作った。先輩が入れ替り立ち替り道場を訪れる。

こうして漸く部全体が強くなった。皮切りが本荘大会。秋田山形選抜で初優勝した。団体練習（五人立）、ひとり四射、計二十射中十五、十六本が普通。十八、十九本も毎日出る。個人練習も皆中者（四射）が毎回三、四人は出る感じ。全県総体の結果は準決勝の対湯沢（9―5）、決勝の対中央（10―7）ともプレッシャーがかかって日頃の当たりが出なかったが、念願だった優勝旗を手にすることができた。



9年ぶり全県総体男子団体優勝の弓道部

六月三十日の県民体育大会でもインターハイ出場校ということで絶対に負けられない一戦。三人立。結局第一次、第二次予選とも十本を当てて本校がトップで決勝進出。強豪本荘、地の利の中央ともに予選敗退。男鹿（6―4）、湯沢（7―4）のリーグ戦の末、本校が優勝。東北ミニ国体の出場権を得た。

県体後わが弓道部は三つの目標を掲げて新たに出立することにした。三年生を中心として、'59インターハイを勝ち抜く道。二年生を中心として、全県新人戦（東北→全国）を勝ち抜く道。そして三つ目の目標は―わが弓道部も秋高内で部員数40名を数える大手の部になった。そのうち一年生が男女合わせて20名も入った。この一年生をいかに鍛えて伝統の継承者として養成するかである。黄金時代をつくらねばならない。道場に全県総体優勝以上の額を掲げねばならない。いまの高校生には現実の努力に裏打ちされたロマンが必要である。

漸くわが弓道部も弓道の究極の精神たる「立禅」の思想を垣間見ようとしている。三つの目標が見事に達成され、前途に栄光の輝くことを切に祈念するものである。

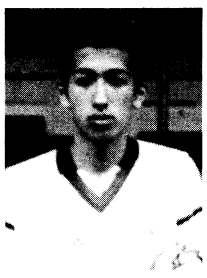
（顧問　田口能祐　記）

バドミントン部

〝魚谷啓法、シングルスで東北を制す〟――近年にない快挙である。十三回目を数える東北高校バドミントン選手権大会だが、本校はもとより、秋田県勢が、団体、個人を含めて初めて獲得したタイトルである。

三十余年といえば本校運動部史の中では決して古い方ではない。しかし、秋田県バドミントン史の中では草分け的存在であり、幾多の名選手を輩出し、全県制覇も六回を数える。それも昭和三十五年までで、その後、個人戦で何人かのインターハイ出場選手を出したが、（その中で、五十五年、女子単で全県優勝した児玉礼が特筆されるが）長い〝冬の時代〟が続いた。

今年は久々の〝春〟の到来である。魚谷を軸にして、二十四年振りの団体優勝をねらえるまでにチーム力が向上した。昨年末の全県低学年大会、同新人戦ではいずれも決勝戦でライバル横手工高と激突、一勝一敗に終わっている。だから、六月の全県総体はその決着をつけるべき天下分け目の戦いであった。結果的には選手層の薄さで、スーパースター・魚谷の力を生かしきれず涙をのんだ。代りに単・複の二冠を得た。



東北大会で単に優勝した魚谷選手

今年のインターハイには地元の利で、準優勝の団体戦も出場権を得、フルエントリーできる。全国的なレベルにはまだ遠いが、単で魚谷が八強、四強に食いこめるか。地元の熱い期待を受けて只今絶好調。

追記：日本のバドミントン界で最も長い歴史を持つ「秋田高対黒石高定期戦」は、今年三十回記念大会。八月十一、十二日黒石高で。OB諸氏多数の参加を切望しています。

（顧問　柴田俊二　記）

卓球部

輝やかしい歴史と伝統をもつわが卓球部も、ここ三年間に、総体・新人戦をあわせ、地区大会では、三度、宿敵秋商を破り優勝していながら、本番ともいえる全県大会では、残念ながら秋商の前に涙をのみ、準優勝に留まっている。

59秋田インターハイに出場できるのは、選手の頑張りは勿論だが、OB会、父兄会はじめ、周囲からの並々ならぬご支援によるものと深く感謝している。

現在、部員27名、うち三年生7名であるが、練習の厳しさから、部と学習の両立に不安を感じ退部する者が多く、三年まで頑張り通す者が1～2名、あるいは皆無ということが常だったが、昨年、一昨年とも、5名以上が最後まで頑張り通した。これは、一昨年の父兄会結成と機を一にしており、家族の理解、協力、激励なしには、部と学習の両立が困難な証左ともいえる。

一方、卓球部OB会（蓼沼良一会長、26年卒）からは、コーチ派遣等、絶大な支援を受けており、秋田インターハイに向け強化に取り組み、今年に入ってから、東京での遠征合宿二回、卓球名門校三本木高校（青森）への遠征などを重ねてきた。特に今年三月の早稲田大学で行われた強化合宿では、元世界チャンピオン・木村興治氏（34年卒・昨年の世界卓球選手権東京大会の事務局長）の指導を受けた。

また学校での合宿中の土曜日の夜や日曜日には、選手の数を上まわる程、数多くの先輩が指導コーチにかけつけてくれ、練習場の小体育館も千客万来の賑わいとなる。こうした連綿と続く先輩との絆の中で、後輩はすくすくと育くまれている。

今年のインターハイには、団体のほか、ダブルスに織田・佐藤（立）（3年）（東北大会では三位）、シングルスには、猿田（二年）、織田・佐藤（立）の三人が出場権を得ており、ほかに二年生、一年生には有望な選手が多く、来年が楽しみである。

なお、秋田県卓球協会は、会長の小林忠雄氏（28年卒）、今年四月から理事長に就任した佐々木岩男氏（31年卒）のほか、本校出身の役員が多数活躍し、その様は躍如たるものがある。

（顧問・出口　金也　記）

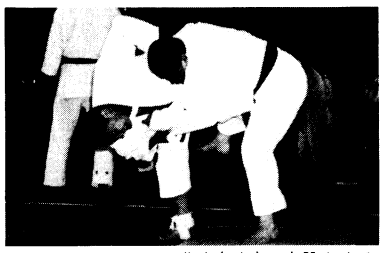
柔道部

我々柔道部は、今年秋田県で全国高校総体があるということで、いつも以上に全員が燃えている。

昨年度は冬休みの東海大附属相模高への遠征合宿など、普段の練習と共に、より実戦的な内容の濃い練習を積んだ。全国高等学校柔道選手権大会の秋田県大会ではその成果が十分出て経法大附高を破り優勝を果した。

しかし、東北大会、全国大会では、それぞれ経法大附高、福岡代表の嘉穂高に惜しくも敗れ、悔しい思いをみんな味わう結果となった。

春休みの東海大での合宿は、東北・全国大会で出た欠点を直すという意味で大変よい合宿だった。東海大では連日、全国のいろんな高校と練習試合をした。自分たちと同じ高校生と戦って、結果はさまざまであったが、みんな全国レベルで試合をしたことで何かを学んだことが成果であった。



ポイントゲッター加藤亮（3年）の内股きまる

本年度は新一年生の入部で、全員気持ちが新たに引きしまり、一層チーム全体がまとまり、ムードが盛り上がっているし、練習も充実している。

高校総体の中央地区大会では、再び経法大附高を破り優勝。県大会では決勝で附高に破れたが全国大会に出場することができるとともに（三年生のキャプテン土佐之宏先輩が重量級で優勝し、個人戦に出場することが決定した）全国高校総体に出場するということは、去年の先輩のかなえられなかった目標だったので、我々後輩は地元で開催されるということと共に、それを刺激に充実した練習に毎日あけくれている。

秋田の柔道は全国的に見るとかなり低いレベルのように思われている。しかし、今まで支えていただいた先輩諸氏、父兄や地元の方々に報いるためにも上位に進出し低迷秋田を吹き飛ばすように頑張りたい。

（二年・副主将　高橋　司　記）

剣道部

我が剣道部は、昨年学校創立百十周年に加えて創部百周年を迎えた全国的にも古い歴史をもつ部である。創部百周年にちなんでいろいろな記念行事が行われたが、そういう場においていつもたくさんのOBの方々に言われることと言えば、今年秋田で開かれる'59インターハイに是非とも出場を果たし、上位入賞を目指して頑張って欲しい、ということであった。

昨年の総体後、今のメンバーにバトンタッチされ、皆何らかの形で〝インターハイ〟を胸に秘め、密度の濃い練習をこなして来た。異例の秋合宿も実施し、その結果昨年十二月の全県新人戦で見事優勝することが出来、インターハイ指定校にもなった。

その後、一段と練習にも熱が入り、技術の向上はもちろんのこと、日々精神の練磨に励んで来た。二回の県外遠征を含む毎月一回の合宿、というかなりハードなスケジュールをこなし、六月の全県総体に臨んだ。今年はやはりインターハイ予選という色が濃く、どこの学校も気迫に満ちていた。我が秋田高校も部員一同一丸となってどこにも負けない気迫で挑み、その結果秋田南に敗れはしたものの準優勝を収め、念願のインターハイ出場権を手に入れた。総体二週間後に山形で行われた東北大会でも準優勝、とチームの状態はずっといい流れで来ている。

山崎選手の小手きまる

確かに勉学とのバランスを保って毎日の厳しい練習をこなすのはかなり難しいことであると思う。しかしこうしてインターハイにじかに参加できるということは限られた人にしかないことであり、本当に幸運なことだと思う。だからこそ、県の代表であるという誇りを強くもち、残り一カ月気を引き締めて稽古に打ち込んでいきたいと思う。そしてその努力の成果を八月十七日からの全国総体で最高の形で発揮し、OBの方々や部・学校関係者の期待に添うことができるよう、頑張っていきたいと思う。

（マネージャー・高橋祐子　記）

へんしゅう室

昨年創立百十周年で燃えた秋高は、今年は59インターハイで燃えています。現在のところ、水泳を除いて団体出場は六チーム39名（含個人）、レスリング個人1名の計40名ですが、高校生一人一役ということで、補助員等の名目で、各自がなんらかの貢献をすることになっているからです。大会を成功させよう。

▽今年度の編集委員です。

校外
編集長　大嶋　民治（昭8）
副編集長　沢石　謙（昭12）
編集委員　一関　吉美（昭14）
同　辻　悌五郎（昭27）
同　長野　佳司（昭29）
同　今田　猛（昭31）
同　植村　久美（昭37）
同　根布谷　豪（昭46）
校内
編集委員　杉田　宏（昭21）
同　田口　能祐（昭22）
同　竹内　一朔（昭28）
同　松岡　正樹（昭30）
同　高橋　一成（昭41）
同　大久保正樹（昭42）

よろしくお願いいたします。